

## 市町村におけるソーシャルクラブ事業の課題

### Problem of Social-Club Service in Municipality

栗原 浩之\*

Kurihara Hiroyuki

#### 1. はじめに

筆者は現在、P県Q市が実施しているソーシャルクラブ事業の運営にソーシャルワーカーとして関わっているが、障害者自立支援法施行から1年以上を経過しながらも、精神保健福祉の現場は依然、混沌とした印象をもつ。同法には含まれていない市町村が実施するソーシャルクラブ事業はこうした状況下でどうあるべきか、本稿はQ市の事例から、ソーシャルクラブ事業の課題について考察することとした。

#### 2. Q市におけるソーシャルクラブ事業の概略

##### 1) 事業実施の経緯と特徴

精神障害をもつ当事者を対象とした社会的リハビリテーション資源として市町村が実施しているソーシャルクラブ事業は、精神保健福祉業務の市町村一部移譲となった平成14年度以降に保健所から引き継いで実施しているところも多いように見受けられる。しかしながら、交通の利便性の問題、市町村の財政的な問題、利用者たちの環境変化に弱い特性がある等、複数の理由からこの移行がスムーズにいかなかったケースも珍しくはなく、保健所が主体的に実施している地域も残っている。そのような中、Q市においては、平成13年度から市が主体的に準備を行ったことにより、利

用者側の大きな混乱もなく運営を保健所から引き継ぎ現在に至っている。

市内の通所資源は医療機関デイケアの他、地域活動支援センター、就労継続支援事業所が複数所在している。ソーシャルクラブ事業の利用にあたっては、公的機関が実施することから、通院医療機関を特定した制限を行っておらず窓口が広く設けられている。利用者紹介元の多くは医療機関であり、他の地域資源を経由してからソーシャルクラブ事業利用へと辿り着くというよりは、はじめての通所資源として利用へ至っている傾向にある。こうしたことから、ソーシャルクラブ事業は地域におけるリハビリテーションのプライマリーステージとしての機能をもっているものといえる。

事業の利用が順調な者については、個別担当スタッフが利用者の希望に基づいて、地域の他の社会資源へ活動の幅を広げていく流れとなっており、市内各機関との連携は事業同様、重視されるものである。

##### 2) 利用者の状況とスタッフ体制

Q市におけるソーシャルクラブ事業は、単にプログラムを通じたグループ活動によって利用者の社会化を促進するのみならず、精神障害をもつ当事者たちが、自分たちの考え方や生き方について話し合うことによって、相互の自助機能を高めつ

\*社会福祉演習・実習室助手

つあり、治療グループ<sup>1)</sup>としての要素を多く含んでいる事業である。当事業は現在まで利用期間についての定めを設けていないため、利用者の通所年数はさまざまである。2007年9月末日現在の利用登録者は45名であり、毎回25名程度の利用者を数える大規模なグループ活動となっている。スタッフは保健師2名と筆者の計3名で行っており、それぞれの利用者には別途、個別担当スタッフが配置され、入会から退会までの個別支援を行っているが、運営に携わるスタッフが複数となることから円滑な協働<sup>2)</sup>が求められている。

3) プログラム

ここでは、2007年度上半期のプログラム（表

1) を例示する。プログラムはレクリエーションが中心となっており、参加、不参加は利用者の自由である。参加者はレクリエーションプログラムを媒介として、コミュニケーション機会を重ねていくこととなる。プログラムの作成にあたっては、3ヵ月ごとに利用者が司会進行をつとめながら話し合いを通じて決定しているが、同じプログラムが循環している傾向にある。

3. ソーシャルクラブ利用者への意識調査の実施

1) 調査の概要

Q市のソーシャルクラブ事業利用者を対象とした意識調査（表2）を2007年8月に実施した。ア

（表1）ソーシャルクラブプログラム（2007年度・4～9月）

月	回	AM	PM
4月	①	外出(お花見)	同左
	②	音楽鑑賞	ソフトバレー
	③	外出(カラオケ)	同左
	④	調理	茶話会
5月	①	ビデオ鑑賞	ソフトバレー
	②	リズム体操	室内ゲーム
	③	スポーツ	卓球・カラオケ
6月	①	外出(ハイキング)	同左
	②	美術	ソフトバレー
	③	プログラム作成	ストレッチ
	④	調理	フリートーク

月	回	AM	PM
7月	①	音楽鑑賞	創作(絵手紙他)
	②	美術	ソフトバレー
	③	外出(カラオケ)	同左
	④	スポーツ	ストレッチ
8月	①	外出(ボーリング)	同左
	②	ビデオ鑑賞	同左
	③	外出(散歩)	同左
	④	調理	茶話会
9月	①	リズム体操	書道
	②	プログラム作成	ソフトバレー
	③	スポーツ	室内ゲーム
	④	スタッフプロ(栄養)	卓球・カラオケ

（表2）ソーシャルクラブ事業利用についてのアンケート（無記名）

①ソーシャルクラブ事業の利用年数 約 \_\_\_\_\_ 年

②ソーシャルクラブ事業を利用している目的は何ですか？

③ソーシャルクラブ事業に来てよかったと思うことがありましたらお書きください。

④ソーシャルクラブ事業の感想としてあてはまるところに○をつけてください。  
 すごく楽しい ・ 楽しい ・ 普通 ・ あまり楽しくない ・ 楽しくない

⑤楽しみなプログラムがありましたらお書きください。

⑥苦手なプログラムがありましたらお書きください。

⑦今後、とりいれてほしいプログラムがありましたらお書きください。

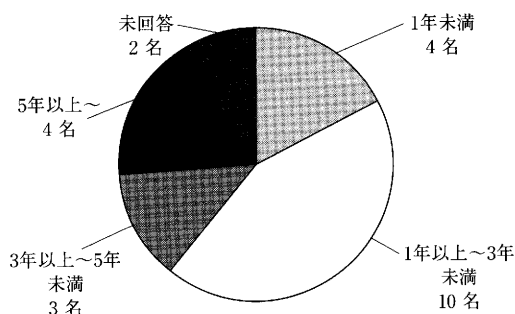
⑧ソーシャルクラブ事業の利用をいつまで続けたいですか？○をつけてください。  
 ずっと続けたい ・ 次の行き場所が見つかるまで続けたい ・ 特に考えていない

⑨あなたの生活にとって、ソーシャルクラブ事業とはどのような存在ですか？

アンケートは本音を引き出すことに重点を置くために無記名方式とし、使用方法については口頭で説明を行い、23名から回答を得た。調査結果の分析についてであるが、自由記述項目については、アフターコーディングにより<sup>3)</sup>カテゴリー化を行った。

## 2) 調査結果

### (1) 利用年数 (図1)



(図1) 利用年数

得られた回答からは、約1年～3年が半数を占めている。保健所で実施されていた当時から利用を通算して約10年と回答している者が2名おり、利用年数はさまざまといえる。

### (2) 利用している目的

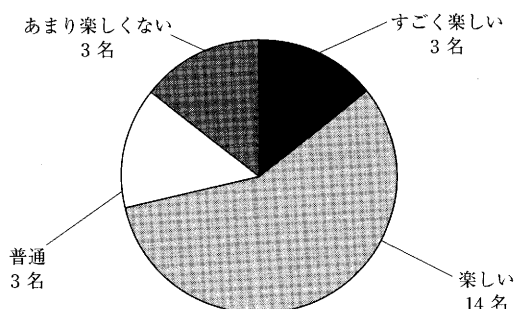
「生活リズムを整える」が7名、「友達づくりと交流」が6名、「就労準備」が3名、「気分転換」、「社会性の獲得」、「リハビリテーション」が各2名ずつであった。

### (3) 利用していて良かったと思うこと

「友達ができた」が13名、「楽しい」が2名、以下、「素の自分になれる」、「経験できないことを経験できた」、「ひきこもりが減った」、「ソフトバレーの上達」が各1名ずつであった。

### (4) ソーシャルクラブの感想 (図2)

この質問については、「すごく楽しい」と「楽しい」をあわせると17名となり、プラス評価をしている利用者が大多数を占めている。一方で5段階評価のうち、「楽しくない」と回答した者はいなかったが、「あまり楽しくない」と回答した者は3名おり、「利



(図2) ソーシャルクラブの感想

用していること=楽しい」という構図にはなっていないことがうかがえる。

### (5) 楽しいプログラム (複数回答可)

ソフトバレーボール、調理、カラオケ (カラオケボックス) の順に数が多かった。

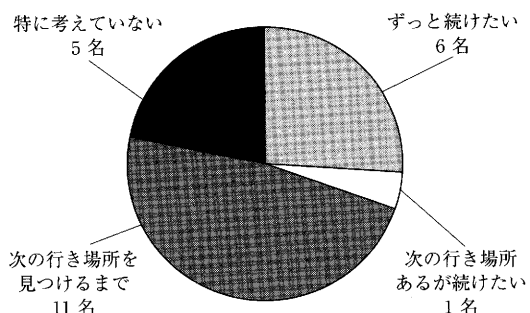
### (6) 苦手なプログラム (複数回答可)

ソフトバレーボール、リズム運動、カラオケの順に数が多かった。リズム運動を除いてあげられたプログラムは、楽しいプログラムとしてあげている利用者も多いことから、利用者の希望はさまざまといえる。

### (7) 今後、とり入れてほしいプログラム

この項目について回答している者は、5名にすぎず、「バーベキュー」、「野外スポーツ」、「ヨガ」、「博物館・美術館見学」、「自主グループ活動」といったものであった。

### (8) 利用をいつまで続けたいか (図3)



(図3) 利用をいつまで続けたいか

23名のうち6名が「ずっと続けたい」と回答しているが、この6名の利用年数はさまざまである。また、「次の行き場所が見つからないけれども続けたい」が1名であり、その理由として次の行き場所における自身の

「居場所」が確立できないことを回答している。「次の行き場所が見つかるまで続けたい」と回答している者は11名を数えたが、そのうち何名かが、他の市内の通所資源を「併行利用」している状況であると推測される。次の行き場所をすでに確保しながらも回答に反映されていない可能性があり、質問方法の配慮不足も考えられるが、こうした回答が出てくる原因ははっきりしないところである。

#### (9) ソーシャルクラブの存在

「週1回の居場所」という回答をした11名の他、「生活していく上での楽しみ」が2名、「復職のためのリハビリの場」、「自立のための場」、「自己表現をひろげるための場」、「とても大切な存在」「人生の楽しみ」「心のオアシス」が各1名ずつおり、事業が利用者自身の内面に深く影響している存在ととれる回答も見られた。

以上が調査結果である。利用者との日常の対話のみでは汲み取ることの難しい意見等も出され、とても興味深い結果が得られた。

## 4. 考察

### 1) 新たなプログラムの導入の検討

アンケートには新たなプログラムの導入希望についての項目を盛り込んだが、提案した利用者はわずかであった。本事業において、既存プログラムの循環に陥ってしまう一因が精神障害の特性といわれる「関心の幅の狭さ」<sup>4)</sup>に負っている可能性も否定できないところであろうが、今後のプログラムについては、中村<sup>5)</sup>が、「メンバーに提供できるものや刺激となるものが場にあってこそ、メンバーは自発性を発揮し生き方を見つけてゆける」と述べているとおり、利用者の希望を十分に踏まえながら、スタッフもプログラムのあり方に参画する必要性が出てきているといえよう。また、利用者の希望がまとまらない際には、プログラムに応じてグループを細分化する<sup>6)</sup>といった手法を採用し、少しでも利用者の希望が反映されるよう、運営方法を検討していくことがのぞまれる。

### 2) ゴール設定を問う必要性

精神障害をもつ当事者を対象としたリハビリテーション機関の多くには、ゴール設定の問題<sup>7)</sup>が大きく立ちはだかっている。池淵<sup>8)</sup>は、医療機関デイケアにおいて卒業できない利用者の典型例として、「病気になってしまっただけでかなり障害が重いために、デイケアの外に当面の生活の目標を見出すことができなくなる場合」や、「中途半端にデイケアに来ているけれども、デイケア卒業、つまり次の目標に行けないということ」をあげている。

アンケート調査におけるソーシャルクラブ事業の利用については、「ずっと続けたい」と回答した者が6名おり、ソーシャルクラブ事業が、居心地の良い場所である一方、次の目標を見出しにくい状況にあることがうかがわれ、本事業が医療機関デイケアにおいて生じている問題と重なっているように考えられる。

もともと、Q市については、事業が保健所主催であった時期から、デイケアを開設しない医療機関が複数存在することにより、地域の拠点となる通所機能としてソーシャルクラブ事業が重要な役割を果たしてきた経緯があった。それゆえ、ソーシャルクラブ事業の利用者に対して利用期限を設定することは、次なる社会資源への展開が絶対的に不足している状況にあり、物理的困難を伴っていたことも事実である。

しかしながら歳月を経た現在、社会資源が増加すると同時に、登録者数も膨らむ傾向にあることから、グループの肥大化に伴う運営への支障が懸念されよう。そのため、利用者のゴール設定のあり方を議論すべき時期にきていることは確かである。ただし、調査における「⑧あなたの生活にとってのソーシャルクラブの存在」という質問に対する回答の中には、ソーシャルクラブ事業が利用者の内面に深く影響を与えている記述がいくつか見られたことから、既存の利用者については、一律のゴール設定ではなく、利用者の意向を踏まえながら十分に吟味していかなければいけないものである。

### 3) 事業が地域においてどのような役割を担うべきか再考する段階

地域資源の充実は、喜ばしいことであるとともに

に、一方ではソーシャルクラブ事業の地域における位置づけについても見直す時期にきていることを示唆するものである。森谷<sup>9)</sup>は医療機関デイケアの現状をあげ、「統合失調症を対象にしたデイケアについては、様々な経験を通じてその方法や効果について共通理解が得られている一方で、統合失調症以外の疾患を対象とする場合には、従来のプログラムとは異なった専門プログラムが設けられるべきものである。」と述べている。昨今、統合失調症患者に限らず、各精神科疾患における総患者数の増加が見られることから<sup>10)</sup>、多くの市町村が実施するソーシャルクラブにおいては、リハビリテーションニーズの多様化にむけた対策が求められつつあるのではないだろうか。Q市においては、すでに統合失調症とは異なった疾患別のグループ支援の事業化へ早々に着手しており、この問題については解決しつつあるように見受けられるが、インクリメンタリズム<sup>11)</sup>と定義される予算編成にある中で、ソーシャルクラブ事業以外の新規事業の立ち上げが難しい自治体は多いものと推察される。こうした自治体については、ソーシャルクラブ事業単体で多様化する住民ニーズをとらえるのではなく、地域内の通所資源を担う機関が集い、協議を行い、重複している機能や役割については見直す一方で、空白となっている資源の分析、補填へととり組んでいくことが現実的であろう。市町村の実施するソーシャルクラブ事業が、障害者自立支援法による事業所では満たせていない、不足している通所資源の役割を積極的に担うべき立場にあることは言うまでもない。

## 5. おわりに

本稿は、Q市の事例を通じて、ソーシャルクラブ事業の抱えている課題について考察した。ソーシャルクラブ事業は、地域の「精神保健福祉に関する歴史や文化」を反映している事業といえるが、同時に、時代によって変容するニーズにも応えられるフレキシブルな側面も兼ね備えていくことが求められるよう。

## 注

- 1) ロナルド・W・トーズランドほか/野村豊子監訳『グループワーク入門～あらゆる場で役にたつアイ

デアと活用法』中央法規 2003. P.33

Q市におけるソーシャルクラブ事業は、本著において治療グループの目的としてあげられている5項目のうち、「サポート」および「社会化」に該当している。また、社会化を目指すグループの3つの類型化に照らし合わせると、レクリエーショングループとしての性質を強く帯びているものといえる。

- 2) Michael Preston-Shoot『EFFECTIVE GROUP WORK』MACMILLAN PRESS LTD 1987. P.70～71

複数にわたるスタッフの協働にあたっては、各スタッフがグループ運営で課題が生じた際の考え方や感じ方、専門職としてのバックグラウンド等についての相互理解を深めていくことが前提となるものである。Q市においては、事業実施の前後にミーティングを行い、コ・リーダーシップをはじめとしたスタッフ間の協働の円滑化にむけとりくんでいる。

- 3) 岩田正美ほか編『社会福祉研究法』有斐閣 2006. P.158
- 4) 昼田源四郎『分裂病者の行動特性』金剛出版 1989. P.22～23
- 5) 中村正利『精神障害者を支えるグループミーティングのメソッド～作業所・デイケアでスタッフのできること』金剛出版 2007. P.60～61
- 6) Sondra Brandler・Camile P. Roman『Group Work～Skills and Strategies for Effective Interventions』The Haworth Press, Inc. 1999. P.161～163
- 7) 施設利用におけるゴール設定がなされない現状について、精神障害の特性から、見守りなどの支援をし続けることの大切さが強調される一方で、キャリアパスが図れる対象者についてまで、同様の支援でよいものかどうかという疑問が投げかけられている。新保祐元『精神障害者の自立支援活動ー生活支援の原点と自立支援法の実践課題ー』中央法規 2006. P.158
- 8) 池淵恵美「デイケア治療の導入から卒業まで」安西信雄編著『地域ケア時代の精神科デイケア実践ガイド』金剛出版 2006. P.86
- 9) 森谷就慶「精神科リハビリテーションにおける病院付設型デイケアの有効性と限界」Journal of health & social service, No.3 2004. P.24
- 10) 精神保健福祉白書編集委員会『精神保健福祉白書 2007年版』中央法規 P.211
- 11) 坂田周一『社会福祉政策』有斐閣 2000. P.187～189

坂田はインクリメンタリズム（増分主義ないし漸増主義）を定義したウィルダフスキーが、行政庁に

おける合理主義的予算の実現は困難と実証したことを引用し、「インクリメンタル予算では、過去の実績を踏まえてそれを少しずつ充実する手法がとられるが、そうすることによって何が達成されるのかがわ

からず、ともかくも現行の手段を維持することが目的とされる本末転倒したことが起こる」と述べている。